2018.2/高知大学予想問題 3

過疎化・高齢化が進展していく中で、経済的・社会的な共同生活の維持が難しくなり、社会単位としての存続が危ぶまれている集落。いわゆる限界集落だ。限界集落はいま全国に広がっていると言われ、小説やドラマの題材になっている。そして、小説『限界集落株式会社』（黒野伸一著）の解説で、書店員の松本大介氏は「『限界』とは当事者が知恵と力の限りを尽くして後、己自身と対話して定めるものであって、他者の基準で一方的に判断されるべきものではない」と述べている。この言葉に込められたメッセージは何か。あなたの考えを６００字程度で述べよ。

人はコミュニティーの中で生きている。どんなに衰退していても、人は自分が生きている地域（故郷）を愛し、守り育てる。それは親や子に対する気持ちに似ている。そういう視点で地域（集落）を見つめ直すべきではないか。これが解説者の言葉に込められたメッセージだと、私は考える。

限界集落とは、６５歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、社会的な共同生活の維持が困難な状況にある集落を言う。確かに、生活にが不便になり、「限界」を感じ、転出した住民がいるのは事実だろう。しかし、現実に人が住んで生活をしている。当事者である住民は、不安は感じても「限界」とは感じていないからこそ、その地域で暮らし続けているのではないか。「限界」と決めたのは、効率を優先させたい第三者の都合ではなかったのか。

人は地域に育まれ、人は地域を育んでいる。そういう人と地域の家族のような関係に焦点を当てる時、行政がなすべきことは、住民の生活を支えることだ。例えば、高齢者の交通手段として乗り合いタクシーを走らせるだけでもいい。そういう支援はできるはずだ。効率を優先させるあまり、行政など第三者が「限界」と呼んでその地域を切り捨てることは、地域の尊厳を踏みにじることになる。

現在、日本は人口減少社会に突入する一方で、東京大都市圏への一極集中が進んでいる。東京への一極集中と地方の衰退はコインの表と裏だ。地方が衰退はいつか東京、さらには日本全体の衰退につながりかねない。地域社会の在り方を真剣に議論すべきときが来ていると考える。